油・油・名物・玩具・化粧品・植木（おもと・朝顔・菊）など、ほかに「福づくし」「橋づくし」などの「見立番付」や「名所番付」など多様な番付がある。なかには、仙台で、明治15年に作られた「宮城人物見立」や「対物宮城の最」など、或る意味で資料的なものもある。

注(4)　対物宮城の最（明治15年７月）

△聞タイ物　佐久間少将ノ軍議　松平県令地方会議△名誉ナ物　西岡判事ノ公判　赤星国手ノ手術△未タナキ物　勅任官ノ拝命　学識活用ノ紳士△雪キ度物　旧藩戊辰ノ失敗　一山百文ノ汚名△望マシキ物　自由党ノ団結　地方官ノ民選△開ケル物　野蒜築港　関山隧道△急キ度物　鉄道敷設　七大工事△怖イ物　虎列刺病ノ伝染　県債負担ノ重荷△遺憾ナ物　田封（村）四郡岩手ニ附ス　七日王城寺西原開拓地ニ占ラル△賜リ物　三好監物祭祀料　林子平位階△捨ラレヌ物　佐久間洞巌観跡聞老志　虎岩道説仙台人物志△疑ハシキ物　壺ノ碑　野田ノ玉川△信シ難物　山家〔やんべ〕清兵衛ノ霊魂　宮沢ノ雞由来△飾ツタ物　伊達厳秘録敵討白石噺△考フ可物　榴ケ岡ノあぜみ　宮城野ノ萩△自慢ナ物　榴ケ岡ノ桜　公園〔西公園〕ノ梅△評判負ノ物　宮城病院　青葉祭り△見事ナ物　仙台ノ花火　松島ノ燈ロウ流シ△毀ツテ惜キ物　青葉本丸ノ建物　大年寺△厚ク成タ物　世人ノ面皮　饅頭ノ皮△盛ニ成タ物　民権議論　農家ノ奢侈△喪タル物　日本魂　結髪家△重ク成タ物　贅物ノ賦金　軍人ノ帯剣△耳馴レタ物　鎮台ノ号砲　新聞ヤノ重禁錮△左様デモナイ物　奥州ノ喰斃レ　仙台ノ陰讒謗△間違タ物　仙台味噌ヲ仙台ウソ　奥州ノ費ヒ小便ヲ連レ小便　△麁末ナモノ　旅人ノ問ニ道知ラセ　士族商人ノ客扱ヒ△真面目ナ物　瑞鳳山ノ霊屋守リ　田舎剣舞ノ太鼓背ヲイ△味ノ悪イ物　市中蕎麥ノタレ　比丘尼坂ノ甘酒△士族ノ家ニ残物　古ル上下　刀ノ小道具△掘テモ出ナイ物　栗原築館ノ金　名取埣沼ノ宝△奇タイナ物　三居沢片葉ノ芳　笠島ノ道祖神〔対物144組の内。下略〕

資料　番附類（山本　晃。「仙台郷土研究」第１巻第11号の内）
仙台郷土文献展覧会（「わしが国さ」第39号の内）

77.　「仙臺風」という古書

問　テレビで見ました、Y大学の秋山史郎教授著の「仙臺風」という本がありますか、仙台は昔から米や食物が豊富なので生活が楽であったため、他国から移り住む者が多いと書いてあるそうですので、原文を読みたいので。

答　「仙台風（せんだいぶり）」という本は、名古屋市の江戸軟文学研究者として高名な尾崎久弥氏[(1)]所蔵本の中から、昭

和41年、Y大学浅野建二氏が発見、同年2月22日から3月31日までの間、「河北新報」に10回にわたり、その全文に解説をまじえて発表されたものです。その後、昭和44年「日本庶民生活史集成」第9巻（谷川健一編、三一書房発行）に収録活字化されました。テレビ番組での秋山史郎とは、NHKのアナウンサーの名で、Y大学教授の氏名は浅野建二氏で、この点、記憶違いをされていますので、注意して下さい。

この書は、手書きの古書で、高さ23.7㎝、横15.7㎝、墨付き31枚（うち末尾の4枚は「仙台地女之文日」と題す）の袋綴〔ふくろとじ〕本です。表紙は本文と同質の薄手の美濃紙。左上方に「仙臺風」と表題を墨書してあり、内題も奥書もなく、本文も達筆な御家流で書かれています。1面に9行、1行は大体20〜20字から成り、全体の字数約1万2千字程度の内容をもっています。仙台の芭蕉の辻の繁昌ぶりから筆を起し、おおよそ暦月順に仙台及び近郊の年中行事・食物・人情・習俗・音曲・衣服・書道・言語等について、かなり具体的に、しかも方言色豊かな文体で興味深く表現しています。中に、宝暦・明和年間〔1751〜72〕に活躍した歌舞伎俳優中村喜代三(2)（2代）・市山助五郎(3)（2代）の名や、京の浄瑠璃の流行ものの外題の出ていることから、浅野建二氏は、天明初年頃〔1781〜〕の筆写に成るものと推定しています。全体は、貴重な風俗資料として価値高いものがあり、筆者は不明であるが、郷土史家佐々久氏は、寛政7年〔1795〕から文化末年〔1818〕まで、代々仙台藩の御蔵元を勤めた大坂の富商升屋平右衛門、乃至はその一門の者らしいと推測されています。

さて、問題の仙台の豊かさについては(4)、文中に次のように書き記されています(5)。

『今にては京大坂〔阪の字を当てるのは明治以後〕の諸商人も隣あるきする様におもふて　登り下りに諸代〔し〕ろ物も交易し　何一つ不足と言ふ事もなく　日に増〔まし〕月に随〔したがい〕而〔て〕の繁栄　第一米大〔おおいに〕安〔やすく〕シテ食物に富たる所なれば　さまざま働かずにしておこたりながら流レ渡りにすむ者多し　是〔これ〕難有〔ありがたき〕恵にあらずや　余所〔よそ〕の国からうらやみ住〔ずま〕イは此〔この〕御国とぞ申〔もうし〕けり』

注(1)　おざきひさや。国文学者。号楓水。明治23年6月23日名古屋市に生る。愛知一中在校中から創作を始め、「万朝報」等に投稿入選、生田春月らと同人誌「八少女」創刊。明治44年国学院大学高師部卒業。国学院大学講師等を経て、昭和28年名古屋商科大学教授。「江戸時代小説脚本浄瑠璃随筆翻刻物索引」「江戸軟派雑考」「江戸小説研究」「江戸軟文学考典」「洒落本集成」等の編著書がある。江戸軟文学と共に浮世絵に造詣が深く、書誌に通じ「甘露堂文庫稀覯本攷覧」をはじめ、晩年は名古屋市文化財調査委員長として郷土史開発に尽力した。昭和47年6月2日歿。

注(2)　正しくは中村喜代三郎、喜代三は通称。京坂の歌舞伎俳優。名優初代喜代三の子と伝えるが、養子ともいう。安永7年〔1778〕大坂で2代目喜代三襲名。

注(3)　明和、安永時代〔1764〜80〕の歌舞伎俳優。初代助五郎の子。技倆のある俳優だったが、安永5年〔1776〕頃以後の動静が不明となった。俳優よりも音曲に堪能であったという。

注(4) 正しくは米方御蔵元と称した。年々領内の貢米を抵当として御用金の調達を命ぜられていた。大坂の炭屋彦五郎・升屋平右衛門・近江日野の中井新三郎が、次々と蔵元となった。士分の待遇を受けたので、店屋敷のほか、別に侍屋敷を与えられた。年始暑寒には登城して菓子を献じ、主君に謁見するのを例とした。年末には、家臣への給与金1万数千両の現金を、城中勘定奉行所に納入した。

注(5) 大坂の富商。寛政7年〔1795〕から伊達家の御蔵元を勤めた。同11年から年々藩の御物置へ金千両宛献納した。升屋の発行した手形を升屋手形と称し、領内で正金同様に通用した。

資料 仙臺風(「河北新報」昭和41年2月2日〜3月31日分クリッピング)
仙臺風(「日本庶民生活史集成」第9巻の内)

78. 「野老」とは

問 「仙台の七夕祭と盆祭」(三原良吉著)の「盆棚と供え物」の項に書いてある「野老」とは、何と読み、どんなものなのですか。

答 「仙台の七夕祭と盆祭」に、『十三日朝に……それから仏壇の前に横一文字に細い竹を一本吊り、メョーガ、ナス、キューリ、ササゲ、ナンバン、ホーズキ、小さいナシ、リンゴ、コンブを各二つ糸でつないで、竹に振分けに吊り下げる。これには必ずトコロが無くてはならないことになっている。野老はホトケノヒゲなどといって仏さまはトコロのヒゲをつたわって仏壇に上るといわれている。…』

この「野老」とは、「ところ」と読み、やまいも科の多年生蔓草で、その根茎は非常にひげ根が多いので、ホトケノヒゲといって、盆祭の吊り下げ用としてなくてはならないものとされていたのです。

なお、同じ著者の「仙台民俗誌」(仙台市史」第6巻の内)の「歳時」の項の中に『七月十三日(旧)…棚の上に細い竹を一本横に吊り、これにメョーガ、青ナンバン、ササゲ、枝豆、茄子、胡瓜、夏梨子、ホーズキ、ボンメ(昆布)、ソーメンなどを下げる。この中に無くてならないのは野老(ところ)で、トコロはホトケノヒゲなどといってホトケさまはトコロを伝わって家に帰るという。』とあり、「野老」に「ところ」とルビをつけてあります。「和名類聚鈔」(源順編)巻17には、正宗敦夫編の同書索引の「ところ」で本文に当ると、「薢」〔かい。「ところ」の漢字〕の標目のもとに『和名土古呂(ところ)[1]俗用茖〔ところの国字〕』としてあります。

また、「野老」は、山野に自生するので簡単に手に入ったもので、その根茎は苦味があるが、よく食用とすることがあったものです。江戸時代には、ひげ根のついた根茎を、老人のひげになぞらえて、正月に長寿を祝した風習もありました。「野老」の語源については、「東雅」[2](新井白石[3])に、次の